様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００８１

研究課題名（和文）経験的データに基づく主格・対格目的語の作用域と情報構造・韻律の研究

研究課題名（英文）An empirical study on the nominative/accusative objects in terms of their domains, information structures, and intonations

研究代表者
野村　昌司（Nomura, Masashi）

中京大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：６０４１０６１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主格・対格目的語の統語的、情報構造的、韻律的振る舞いについての知見を深めるため、日本語および韓国語の実験で得られた経験的データの分析を主に行った。実験方法には、容認度判断実験に加えて知覚実験を行うことで、多角的な視点から当該現象の分析を試みた。その結果、文の情報構造が主格・対格目的語の容認度およびその使用に影響を与えることが判明した。また、助詞「が」が情報構造的焦点を表示するはたらきを担っていること、また、それと対比する形で「は」が必ずしも主題を示すのではなく単に情報の既知性を示す場合がある、という説に対する新たなエビデンスが得られた。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the nominative/accusative objects in terms of their syntactic, information structural, and prosodic behaviors, making use of empirical data from experiments in Japanese and Korean. We have conducted experiments with acceptability judgment and perceptual tasks in order to analyze the phenomenon from a various point of views. The findings tell us that the use of the nominative/accusative objects is affected by information structure of a sentence. In addition, the data provides new evidence to support the hypothesis that the particle ‘ga’ functions as information structural focus, and ‘wa’ covers old information other than topic.

研究分野：統語論

キーワード：主格・対格目的語　統語論　音声知覚実験　容認度判断実験　コーパス　情報構造

１．研究開始当初の背景

これまで日本語の主格・対格目的語については、統語論の分野を中心として多くの研究が行われてきた。述部が可能形もしくは願望形である場合、目的語には主格助詞「が」もしくは対格助詞「を」が使用できる（１）。 また、Shibatani（1975）では目的語と述部が非隣接である場合は主格目的語の容認度が下がると指摘されていた（２）。

（１）隣接環境
　　なおやはゾウが見たいそうだ。
　　なおやはゾウを見たいそうだ。

（２）非隣接環境
　　なおやはゾウがインドで見たいそうだ。
　　なおやはゾウをインドで見たいそうだ。

こうした知見を踏まえ、本研究では新たに経験的データを得ることでより多角的な面から当該現象の分析を試みるという背景があった。また、これまでなされていなかった韓国語との比較を行うことで、言語の普遍的特徴の解明に貢献する意図もあった。

２．研究の目的

（１）これまで統語論の分野を中心として研究が行われてきた日本語の主格・対格目的語、特に願望形述部の場合について、経験的観点から文の情報構造を反映する韻律的特徴が主格・対格目的語の選択に与える影響を考察することを目的とした。

（２）統語論で議論されてきた目的語の作用域に対する韻律・情報構造の影響を明らかにすることで、統語構造上の主格目的語と対格目的語の位置を明確にすることを目的とした。

（３）日本語と韓国語の当該現象とを比較することで、言語に普遍的な情報構造と韻律のメカニズムを解明することを目的とした。

３．研究の方法

（１）主格・対格目的語の特徴を捉える手段として、まず文を読んでその容認度を判断する課題を採用した。ここでは、文脈なしの単独文で提示された目的語の容認度を測る実験と、文脈をつけることで文の情報構造を明確に提示した上で容認度を測るという２種類の実験を行った。

（２）次に、目的語を含む文に情報構造を反映させた韻律をつけて、その文の容認度を測る音声知覚実験を行った。

（３）主格・対格目的語の一般的特徴を把握するため、それぞれの使用頻度をコーパスを用いて調査した。

（４）データの分析方法には、統計解析ソフトＲを用いた線形混合効果モデルを採用することで、被験者間の差や刺激文間の差を統計的に処理した上で結果を考察することができた。

４．研究成果

（１）主格・対格目的語を含む文を単独で提示した容認度判断実験により、先行研究で言及されていた隣接性の効果を確認することができた。隣接性の効果とは、主格目的語がその述部と隣接でない場合に文の容認度が低下する現象であるが、これまでにまとまった経験的データが提示されていなかった。本研究で行った実験結果から、その効果の存在を統計的有意差をもって示すことができた。また、隣接性の効果の存在は、主格・対格目

的語が言語変異として全く同じように機能しているわけではないことを示したことになる。

（２）主格・対格目的語に観察された差異の原因を探るため、音声知覚実験を行った。そこでは、文脈つきで音読された文の録音を使用することで、情報構造を反映した韻律のついた文の容認度判断を行った。その結果、韻律が主格目的語の使用を許す情報構造を反映している場合に容認度がより高くなることが判明した。

（３）さらに、文脈を与えた主格・対格目的語を含む文を読んで容認度を判断させる実験を行った。この結果も、文脈によって作られる文の情報構造が主格目的語の使用を許す形の場合に、その容認度の上昇が認められた。以上の結果は、助詞「が」が情報構造的焦点を表示するはたらきを担っていることを反映していると論じた。また、それと対比する形で「は」が必ずしも主題を示すのではなく単に情報の既知性を示す場合がある、という説に対する新たなエビデンスを提示していると議論した。

（４）韓国語においても同様の知覚実験と文を読んで容認度を判断する実験を行ったが、日本語で行った実験のような結果は得られなかった。その原因として、韓国語の方言のコントロールなどの課題や実験で用いる文の詳細な調整などの影響も考えられるため、言語間の差異の有無について言及するには今後さらに調査する必要がある。

（５）主格・対格目的語の使用分布を探るため、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「日本語話しことばコーパス」の２種類のコーパスを用いた調査を行った。その結果、隣接性の効果を反映した使用頻度が、書き言葉でも話し言葉でも明らかとなった。また、主格・対格目的語の使用分布は、願望形述部では対格目的語が主格目的語より多いことが判明した。これは、主格目的語が情報構造的焦点を与えるという文脈上である特定の役割を担っているためという解釈も可能であるが、今後さらなる調査が必要である。

参考文献

Shibatani, Masayoshi 1975. Perceptual strategies and the phenomena of particle conversion in Japanese. In Papers from the Parasession on Functionalism, 469-480. Chicago: Chicago Linguistic Society.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

1. Nambu, Satoshi, David Y. Oshima, Masashi Nomura, & Hyun Kyung Hwang. “The Nominative/Accusative Alternation in Japanese and Information Structure” Formal Approaches to Japanese Linguistics 8. 2016.2.18. 三重大学 (三重県津市)
2. 佐野真一郎,南部智史「コーパスを用いた現代日本語における「が／を交替」の実証的研究」第 150 回 日本言語学会.2015.6.20. 大東文化大学板橋キャンパス (東京)

〔図書〕（計 1 件）

1. Nambu, Satoshi. & Hyun Kyung Hwang. Prosodic Focus and Nominative/Accusative Alternation in Japanese. In Proceedings of

the 23rd Japanese/Korean Linguistics Conference [online/electronic version only], pp. 1-10. Stanford: CSLI. 2016.

６．研究組織

（１）研究代表者

野村　昌司（NOMURA, Masashi）
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：60410619

（２）研究分担者

大島　義和（Oshima, Yoshikazu）
名古屋大学・国際開発研究科・准教授
研究者番号：40466644

ホワン　ヒョンギョン（HWANG, Hyun Kyung）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・研究員
研究者番号： 80704858

南部　智史 （NAMBU, Satoshi）
津田塾大学・学芸学部・研究員
研究者番号：40649000